



踏まない線

人は、守ろうとした瞬間に、他者を越える。

多くの無礼は、悪意ではない。

不安や、焦りや、  
内側の揺れが先にある。

輪郭が揺れているとき、  
人は、外側に触れはじめる。

これは、言葉遣いの話ではない。  
態度の粗さを扱うものでもない。

目に見える無礼ではなく、  
静かに起きている、別の現象について。

気づかれないまま、  
境界だけが、わずかに動いている。

内側がほどけているとき、  
存在と評価は、ほとんど重なる。

触れられることは、侵入になり、  
向けられる視線は、圧に変わる。

その前で、  
人は、外側に形を持つようとする。

言葉を整え、  
論理を並べ、  
正しさを置く。

そうして、  
触れる理由を、あとからつくる。

それは、弱さである。  
同時に、生き延びるための動きでもある。

崩れないために、  
越えてしまう。

その動きは止められない。  
ただ、残るものがある。

線は、触れたときには、もうない。





Edition — 存在の芯  
別景：踏まない線

著者：美学思想家 古川玲奈  
発行：Raffiné  
2026